

## 書紀歌謡音仮名と原音声調

高山, 倫明  
九州大学大学院博士課程

<https://doi.org/10.15017/10503>

---

出版情報 : 文献探究. 10, pp.1-6, 1982-09-15. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :



# 書紀歌謡音仮名と原音声調

高山 倫明

万葉仮名(音仮名)は、言うまでもなく字音を借りて日本語を写したものであるが、その「借音」の際、字音の声調は如何なる処遇を受けたのであろうか。

先に筆者は、日本書紀(AD七二〇年撰)の音仮名を対象に、原音声調と日本語との相関性を前提としてその機能的側面(『日本語を表記するにあたり、その)の模索を試みたことがある。本稿では、その「前提」につき、別の角度からもう少し掘り下げて考えてみようと思う。

○

日本書紀には、計一二八首の歌謡が収録されており、すべて一字一音節式の音仮名で表記されている。ここでは、これらの歌謡音仮名を考察の対象とする。ただし、難訓歌として知られる香明紀童謡(歌謡番号一・二二)は、その表記意図を他と全く異にしているようであり、ひとまず除外して考える。歌謡本文は天野晋氏『上代仮名遣の研究』後篇「日本書紀歌謡及び訓注語彙索引」の「本文篇・歌謡の部」を底本とした。

原音声調(調類)は、唐写本王仁開刊撰補缺切韻(AD七〇六年撰と推定)に拠る。書紀音仮名中には本書に見えぬ漢字も若干数存在す

るが、それらについては、『十韻集備考』(台湾学生書局)所収の諸本及び広韻を参照するほどして適宜に処理した。尤もそれら音仮名はいずれも出現頻度の極度に低い特定文字・準特定文字である。また、一個の漢字が、segmentalな部分を等しくしながら複数の調類に属している場合も少なくない。これらについては調類の決定を保留し、仮りに複調字と称して別扱いとする。

さて、切韻音系の調類に就いて音仮名を分類し(その各々を、平声字・上声字等と呼ぶことにする)、各巻毎における出現状況を見よと(表I)のごとくである。このうち、複調字及び出現度の低い入声字をしばらく置いて、平声字・上声字・去声字の出現比率(%)を求めると(表II)のようになる。

この表によれば、巻二二(神代紀上)の数値が相対的に低いのがやや注意されるが、平声字は各巻を通じてほぼ50%に近い比率を占めるのが一般である。そうして、残りの約半数を上声字と去声字とで分けるわけであるが、そこに次のような現象が見出される。

(イ) 上声字の比率を各巻について縦に見てゆくと、相対的に高い数値を示す巻々が、相対的に低い数値を示す巻々(表II)にある。

十四(十九、卷廿四)廿七が、(ロ) 去声字について同様に見てゆくと、相対的に高い数値を示す巻

<表 I>

調類 卷	(甲) 音級名字種數					(乙) 音級名延ハ數				
	平	上	去	入	禿	平	上	去	入	禿
一	7	4	8	0	2	8	4	17	0	2
二	14	12	40	2	8	36	35	109	2	18
三	44	12	44	1	13	186	40	146	1	43
五	37	11	28	1	5	96	24	75	1	21
七	31	13	31	0	6	89	26	66	0	22
九	42	16	29	1	12	160	38	90	2	30
十	36	21	28	1	10	172	55	108	1	38
十一	51	27	53	1	10	416	119	285	3	79
十二	8	2	12	0	3	12	2	13	0	4
十三	40	16	40	1	12	130	45	94	3	55
十四	59	30	35	2	8	299	140	104	2	21
十五	31	22	18	0	5	58	32	23	0	11
十六	47	22	24	2	10	181	81	61	2	35
十七	50	32	30	0	11	174	121	74	0	21
十九	17	10	5	0	1	31	20	8	0	2
廿二	33	15	21	0	8	96	37	59	0	29
廿三	13	0	9	0	3	18	0	10	0	3
廿四	42	23	17	0	4	111	64	31	0	9
廿五	29	13	10	1	3	48	22	16	2	5
廿六	41	19	14	0	2	111	63	23	0	7
廿七	36	19	20	0	3	105	42	41	0	8

<表 II>

<表 III>

卷	(甲)	(乙)
一	0.50	0.24
二	0.30	0.32
三	0.27	0.27
五	0.39	0.32
七	0.42	0.39
九	0.55	0.42
十	0.75	0.51
十一	0.51	0.42
十二	0.17	0.53
十三	0.40	0.48
十四	0.86	1.35
十五	1.22	1.39
十六	0.92	1.33
十七	1.07	1.64
十九	2.00	2.50
廿二	0.71	0.63
廿三	0.00	0.00
廿四	1.35	2.06
廿五	1.30	1.38
廿六	1.36	2.74
廿七	0.95	1.02

調類 卷	(甲) 音級名字種數			(乙) 音級名延ハ數		
	平	上	去	平	上	去
一	36.8	21.1	42.1	27.6	13.8	58.6
二	21.2	18.2	60.6	20.0	19.4	60.6
三	44.0	12.0	44.0	50.0	10.8	39.2
五	48.7	14.5	36.8	49.2	12.3	38.5
七	41.3	17.4	41.3	49.2	14.4	36.4
九	48.3	18.4	33.3	55.6	13.2	31.2
十	42.4	24.7	32.9	51.4	16.4	32.2
十一	38.9	20.6	40.6	50.7	14.5	34.8
十二	36.4	9.1	54.5	44.4	7.4	48.2
十三	41.7	16.6	41.7	48.3	16.7	35.0
十四	47.6	24.2	28.2	55.1	25.8	19.1
十五	43.7	31.0	25.3	51.3	28.3	20.4
十六	50.5	23.7	25.8	56.0	25.1	18.9
十七	44.6	28.6	26.8	47.2	32.8	20.0
十九	53.1	31.3	15.6	52.5	33.9	13.6
廿二	47.8	21.8	30.4	50.0	19.3	30.7
廿三	59.1	0.0	40.9	64.3	0.0	35.7
廿四	51.2	28.1	20.7	53.9	31.1	15.0
廿五	55.8	25.0	19.2	55.8	25.6	18.6
廿六	55.4	25.7	18.9	56.3	32.0	11.7
廿七	48.0	25.3	26.7	55.9	22.3	21.8

< 表 IV >

卷数	歌 話 番 号	※	日本書紀区分論		
			A	B	C
一	1	○	伊	I・II 総合	β
二	2 3 4 5 6	○ ○ ○ ○ ○			
三	7 8 9 10 11 12 13 14	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○			
五	15 16 17 18 19 20	○ ○ ○ ○ ○ ○			
七	21 22 23 24 25 26 27	○ ○ ○ ○ ● ○ ○ ○ ○ ○			
九	28 29 30 31 32 33	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○			
十	34 35 36 37 38 39 40 41	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○			
十一	42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63	○ ○			
十二	64	○			
十三	65 66 67 68 69 70 71 72 73	○ ○ ● ● ○ ○ ○ ○ ⊗ ○			
十四	74 75 76 77 78 79 80 81 82	● ● ● ⊙ ● ⊙ ● ● ○ ●			
十五	83 84 85 86	● ● ⊙ ⊙			
十六	87 88 89 90 91 92 93 94 95	⊙ ● ○ ● ● ⊙ ● ○ ● ●			
十七	96 97 98 99	⊙ ● ● ●			
十九	100 101	● ●			
廿二	102 103 104	○ ○ ○	イ	I 系列	β
廿三	105	○			
廿四	106 107 108 109 110 111 112	● ● ⊙ ● ● ● ● ⊙ ● ●	ロ	II 系列	α
廿五	113 114 115	○ ● ●			
廿六	116 117 118 119 120 121 123	● ● ● ● ● ● ● ● ● ●			
廿七	124 125 126 127 128	○ ⊗ ○ ● ⊙			

■ 上声字去声字出現比 ※

○ || 甲乙とも上声字優勢

⊙ || 甲乙の一方が同数、他方が去声字優勢

● || 甲乙とも上声字優勢

⊙ || 甲乙の一方が同数、他方が上声字優勢

⊗ || 甲乙の一方において去声字優勢、他方において上声字優勢

■ 日本書紀区分論

- A || 太田善磨氏『古代日本文学思潮論 III —— 日本書紀の考察 ——』第二章「日本書紀の部分的徴候」  
 B || 西宮一民氏『日本上代の文章と表記』II部・乙「日本書紀の仮名と卷々の成立」  
 C || 森博達氏『《日本書紀》歌謡における万葉仮名の一特質 —— 漢字原音より観た書紀区分論 ——』(「文学」四五・二)

卷が、ちやうど相補う形で見出される(卷一—十三、卷廿二、廿三)。

これを同一巻内における上声字・去声字の勢力比として見ると(表Ⅲ)のようになる(表内の数値は(表Ⅰ)の上声字の数値と去声字のそれと割ったもの)。(表Ⅳ)は、各歌謡毎に上声字・去声字の勢力比を観察したものである。

卷によつて上声字あるいは去声字が排他的に用いられているといふわけではないので、これらの表から窺えるのは微妙な傾向差に留まるが、ただ、(表Ⅳ)に合わせ示したごとく、その傾向差が、従来の歌謡者仮名からみた書紀区分論での各巻の区画によく符合している点が目ざかるのである。ここから我々は、ここにみる現象が偶然の所産ではないことを予想し得るが、同時にそれは、(西ゲル)プあるいは少なくともどちらか一方のゲル)プの)音仮名字種の選択に、原音者調もある程度考慮に入れられていた可能性のあることを示唆するものと言ひ得よう。

ところで森博達氏は、(表Ⅳ)Cの区画を示された論文において、①)群には日本の漢字音に基く既成の仮名が少なからず含まれてい

るのに対し、②)群の仮名は原則として直接漢字原音(唐代西北方言)を背景に成り立っている、との見解を示された。②)については平山久雄氏から異論が出されているが、(群)が単一の字音体系に依拠しようとする志向が強いという点は動かないようである。一方の(群)に混在する既成の仮名としては、先ず吳音系の仮名が考えられるが、吳音と、唐代西北方言に由来する漢音とでは、その声調体系を異にすることは屢々説かれるところである。右にみた現象は、この二つ(群)の質的相違に關係するものかと思われる。また、筆者は先に、書紀音仮名表記の一部において原音者調が述作時のアクセントを反映している可能性のあることを指摘したが、それが卷三を除くと(群)に多く見出されたことなど、あるいは何らかの関連を有するかも知れない。しかし、いすれも憶測の域を出ない。傾向差の生じ来たつた理由についてはなお熟慮の必要がある。後考を期する次第である。

平山久雄氏は、森氏の「(群)原音依拠説」(平山氏の呼称)に対し、

「音」とは無関係の、いわば表記者の文字嗜好の相違によるという意味で、偶然の現象と解釈する余地があるとして、字音の分析からは説明し難いβ群偏在の音仮名20種を指摘された。今、それらの漢字の(判認補状切類における)調類を見ると、平声字7、上声字2、去声字4、複調字4(上声1、平声3)となり、上声字が比較的に多いのは、右の観察結果からみてやや注意を引く。書記音仮名中から segmental な部分を等しくする上声字・去声字の組を

<表 V>

音節	音仮名	調類	α群	β群
カ	智	上	18	0
カ	阿	上	12	0
カ	阿	去	8	30
ガ	我	上	36	4
ガ	我	去	1	62
タ	他	上	24	5
タ	他	去	7	1
ダ	他	上	2	0
ダ	他	去	0	1
ナ	那	上	1	0
ナ	那	去	2	19
バ	麼	上	10	26
バ	麼	去	4	4
マ	麼	上	12	0
マ	麼	去	19	16
ヤ	野	上	28	1
ヤ	野	去	5	40
ラ	攝	上	1	0
ラ	攝	去	0	18
イ	以	上	8	6
イ	以	去	0	18

シ	始	上	10	8
シ	試	上	0	1
シ	試	去	1	0
ジ	耳	上	4	1
ジ	耳	去	0	1
井	俚	上	2	0
井	俚	去	2	1
ウ	信	上	5	13
ウ	信	去	3	0
ク	字	上	0	1
ク	字	去	28	0
フ	汗	上	5	0
フ	汗	去	2	1
ム	南	上	11	0
ム	南	去	1	20
ム	武	上	0	2
ム	武	去	4	0
ユ	露	上	1	0
ユ	露	去	13	10
ケ	兪	上	1	0
ケ	兪	去	1	0
テ	慳	上	0	1
テ	慳	去	27	0
テ	帝	上	0	1
テ	帝	去	1	0

ネ	禮	上	4	11
ネ	禮	上	0	2
ネ	禮	去	1	7
レ <td>辰</td> <td>上</td> <td>0</td> <td>1</td>	辰	上	0	1
レ <td>辰</td> <td>去</td> <td>22</td> <td>15</td>	辰	去	22	15
コ	古	上	3	3
コ	古	去	1	5
メ <td>固</td> <td>上</td> <td>0</td> <td>1</td>	固	上	0	1
メ <td>固</td> <td>去</td> <td>14</td> <td>0</td>	固	去	14	0
コ	願	上	3	3
コ	願	去	3	3
ト	攝	上	0	2
ト	攝	去	4	1
ト	耐	上	0	6
ト	耐	去	0	6
ホ	保	上	2	8
ホ	保	去	1	1
モ	母	上	32	5
モ	母	去	0	49
ヨ	與	上	7	0
ヨ	與	去	0	29
ヨ	預	上	3	0
ヨ	預	去	2	0
ロ	魯	上	0	1
ロ	魯	去	0	22
ロ	慮	上	6	6
ロ	慮	去	0	1

抜き出し、α群・β群への分布を比べてみると(表V)のようになっていて、明瞭な分布差は得られぬものの、上声字は比較的α群に多く、去声字は比較的β群に多く現れているのは一応注意してよからう。先にも述べたように、上声字・去声字にみる各巻の志向性が排他的・絶対的ではないがゆえの限界はあるが、こういって、点にならざる検討を加えることにより、音的側面から解釈する余地をまだ見出し得るのではないかと推測する。少なくとも、右に見た各巻の傾向差が、書記区分類との符合をもつて有意味な差として認め得るとするならば、音仮名の原音と日本語音節との相関性を分析するにあたっては、suprasegmental な要素をも包括して捉える視点が必要なのではないかと思ふ。

〔注〕

- (一) 書記音仮名の表記体系は、同一音節を表す字種が極めて多く、表音文字の体系としては甚だ未整理な状態にあるところへ、新来の字音(漢音)を多く採用するなど、比較的各種が整理されしかも伝統的漢字音を背景として、成る古事記等のそれらに比して、漢字原音への知識に依存する度合が強かったものと考えられる。
- (二) 拙稿「原音調から見た日本書記音仮名表記試論」(「語文研究」51、昭和56年6月)

- (3) 龍宇純「漢字全本王仁明刊謬補缺切韻校箋」(香港中文大學刊)所載の原本摹本を使用。
- (4) 意味の相違からその漢字のより一般的な声調をある程度までは特定し得るが、徹底をはかることは困難であり、一応すべしを保留とする。
- (5) 平山久雄「森博達氏の日本書紀の群原音仮換説について」(「国語学」128、昭和57年3月)
- (6) 奥村三雄「吳音の声調体系」(「訓点語と訓点資料」8、昭和32年9月)
- 沼本克明「吳音の声調体系について」(「国語学」107、昭和51年12月)等参照。
- (7) 注(3)文献。
- (8) 注(5)文献19頁。
- (9) 森博達「日本書紀歌謡音仮名分布表——漢字原音より見た書紀区分論——資料篇——」を参照した。
- (10) 右のみに、(表V)の数値を合計すると下記のようになる。
- (11) 日常漢語のアクセント型形成に、原音の声調が関与したらしいという指摘もある。

去	上	／
104	351	α
354	149	β